

タイトル	上野誠治先生のご退職記念号に寄せて
著者	森川, 慎也; MORIKAWA, Shinya
引用	北海学園大学人文論集(80): 1-4
発行日	2026-03-31

上野誠治先生のご退職記念号に寄せて

人文学部長 森 川 慎 也

本学人文学部英米文化学科教授の上野誠治先生は、2026年3月31日をもって長く教鞭を執られた北海学園大学を定年退職されます。『人文論集』第80号が退職記念号として発刊されるにあたり、上野先生の本学への多大なご貢献に感謝の意を表し、送別の辞を述べさせていただきます。

上野誠治先生は、1981年に北海道大学文学部文学科英語英米文学専攻課程を卒業、1983年に同大学院文学研究科英米文学専攻修士課程を修了、1987年に同博士後期課程を単位取得満期退学されたあと、東日本学園大学教養部講師、釧路公立大学経済学部講師を経て、1992年4月に北海学園大学教養部に助教授として着任されました。1998年に本学人文学部英米文化学科に異動、2003年に教授に昇格され、大学院の修士課程・博士課程も担当されてこられました。

2016年4月から2019年3月まで人文学部長、2020年4月から2023年3月まで文学研究科長を務められ、人文学部・文学研究科に多大なご貢献をされてきた先生です。先生の学部長時代は、本学人文学部と北海商科大学との単位互換協定が締結され、北海道観光・地域振興特別講座として観光業に携わる道内の識者をお招きした講座イベントが開催されました。研究科長として、北海道大学大学院文学院との協定を締結され、大学院生が相互に特別聴講生として講義を聴講できるための制度を整えられ、また札幌から遠く離れた地域に住む方々向けに双方向型リアルタイム遠隔授業を修士課程に導入されたことも記憶に新しいところです。

先生のご専門は英語学・言語学で、研究対象は統語論から、語彙論、音韻論、さらには英語史まで多岐にわたります。その中でも、With 絶対構文、There 構文、否定表現、英語の語順、ヴェルネルの法則の考察、ゲル

マン祖語における子音変化などが代表的なご研究です。その一部はご高著『言葉の窓から見える風景—英語を手がかりに言葉の世界を探る—』（共同文化社、2014年）にまとめておられます。ご著書を通読いたしますと、上野先生がこれまで歩んでこられた英語学・言語学研究の道とそこから見える風景を垣間見られるような思いをいたします。本書の第Ⅰ部「英語の文法と語法」では、With 絶対構文を考察されたご論考、Google を活用した英語の用例検索に関するご論文が掲載され、日本語・英語の否定表現を論じた第Ⅱ部「否定の世界」では、英語の二重否定や禁止を表す否定 *-ing* 節を考察された論文に加え、関西方言における「へん否定」についての（関西出身の私にとってとりわけ面白い）ご論考も収められています。先生の奥様が関西のご出身ということもあり、関西方言に関心を持たれたとのこと。第Ⅲ部「歴史言語学」では、英語の語順、ヴェルネルの法則、ゲルマン祖語における子音変化について考察されておられ、ヴェルネルの法則を記述した概説書や入門書の解説に見られる問題点を鋭く指摘しておられ、同時に改善策も提示されておられます。言葉にまつわるさまざまな問題を取り上げられておられるだけでなく、門外漢の私でも名探偵ホームズの推理を追っているような気分になれる緻密な論が展開された名著です。

こうして先生のご著書を拝読しますと、その研究の根底には、人間とは何か、人間が用いる言語とは何か、という人文学の本質的な問いが一貫して流れていることがうかがえます。理知的な上野先生らしく、慎重な仮説設定とその検証を経て、言語に潜む法則と原理を明快な文体で解明されています。同著の「あとがき」で、英語との出会いについて触れておられます。小学校5年生のとき、同級生が若い先生から英語を教わっていることを知った上野少年は、ご両親に頼んでその先生から英語を教わるようになったそうです。それがきっかけとなり、日本語と英語の類似、英語の否定表現に強い関心を持たれ、その頃から英語表現の成り立ちについて思考をめぐらせたそうです。さらに大学1年生のときに、当時ベストセラー作家で英語学者でもあった渡部昇一の『クオリティ・ライフの発想』（講談社、1977年）を読まれ、若い先生の知性が大いに刺激されたともうかがいま

した。言葉全般への強い関心、飽くことのない探究心、若かりし頃に抱いた知的生活への憧憬が、先生のご研究の基底になっているのではないかと拝察しております。

人文学部では、各演習や卒業研究に加え、講義科目として英語学概論Ⅰ、英語学特論Ⅰをご担当されてこられました。英語学概論Ⅰでは英語の歴史の変遷、音韻論、形態論、統語論、意味論などの理論的アプローチを教授され、英語史概説を引き継いだ英語学特論Ⅰでは英語の歴史に特化した授業を展開され、古英語・中英語・近代英語の変遷を学生たちに紹介されてこられました。上野先生の講義は学生に人気があり、とくに英語学特論Ⅰを受講したことが端緒になって大学院に進学した学生もいます。また人文学演習では認知言語学を取り上げられ、先生の守備範囲がいかに広範なものかを物語っています。本学文学研究科でも英語研究特殊講義Ⅰ、英語研究特殊講義演習ⅠA・ⅠB、欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢA・ⅢB・ⅢCをご担当され、これまでも数多くの大学院生をご指導してこられました。

教育における先生のご貢献は本学にとどまりません。酪農学園大学、北海道武蔵女子短期大学、北海道大学、北星学園大学、北星学園女子短期大学、北星学園大学大学院、藤女子大学、札幌大学でも非常勤講師として長らく教鞭を執ってこられました。道内で英語史といえば上野誠治先生、と英語学研究者に言われるほど、先生のご研究・教育への信頼は厚く、退職後も他大学で英語史の講義を継続して担当されるそうです。

学会へのご貢献についても触れておきたいと思います。2011年12月から2017年3月まで日本歴史言語学会で理事・広報委員長を務められ、2015年4月から4年間、日本英文学会北海道支部副支部長を、2019年4月から4年間、同支部長を務められました。支部長になられた上野先生から、人文学部の渡部あさみ先生と私が事務局補佐を拝命し、微力ながらも上野先生をお支えできたのは懐かしい思い出になっています。そのときのエピソードがあります。上野先生に支部ホームページの管理を担当してくれないかと頼まれた私が、機械音痴なので無理です、と即答すると、困っ

たな一、ホームページは代わりに私がやるから名前だけでも、とおっしゃり、そこまで言われたら私もそれ以上意固地にはなれず、じゃあ、やります、という話になって、上野先生にさまざまな局面でお力を借りてどうにか支部 HP を管理しました。先生が学会の発展のためにご尽力される様子をおそばで拝見できたことは私にとっても貴重な機会になりました。

もうひとつ個人的な思い出を書かせていただくと、私が本学に採用されることになったときの話です。採用面接では強面で屈強そうな三人の先生に面接され（三人とも心根の優しい先生方だと着任後にわかりましたが）、採用が決まったあと学部長が直々に面接しに行くという連絡が主査の先生から入り、あんな強面の先生たちのボスならとんでもないイカつい学部長が来るんだろうと思っていたところ、仙台空港でお目にかかった当時の学部長が上野先生でした。物腰が柔らかく紳士的で、心底安堵したことを覚えています。

上野先生は、聡明で、謙虚で、研究者・教育者の鑑ともいえるべき先生です。学会に毎年出席され、しばしばご発表もされ、最新の学術研究の知見を収集することに余念がなく、私とは正反対のタイプの学者です。先生は、頭脳が明晰だけでなく、研究室も整理整頓が行き届いていて、昔の資料もきちんと保管しておられ、すぐに取り出せるようになっています。本稿を執筆するにあたり、先生の研究室を訪問したときに、30年以上前に撮られた教養部時代の集合写真を見せていただきました。凛とした顔の30代の上野先生がそこに写っていました。そんな温厚で思慮深い上野先生が本学を退職されるのは寂しいかぎりです。退職されても先生なら言葉の世界をこれからもいっそう楽しく探究されることでしょう。どうか変わらず後進のご指導・ご鞭撻についても心よりお願い申し上げます。

本学における多大なご貢献を鑑みて、2026年4月1日付けで、上野誠治先生に北海学園大学名誉教授の称号が授与されることを最後に申し添えます。